

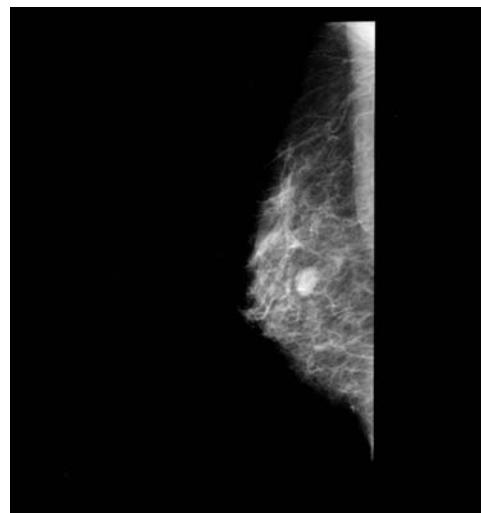
奈良医療センターで 乳がん検診を受けましょう

近年乳がんが急増し、女性が最も多くかかるがんになり、女性の25人に1人が乳がんになるといわれています。また年間約1万人の女性が乳がんで亡くなり、40歳代女性の死亡原因のトップとなっているにもかかわらず、無関心な人が多いのも現状です。

乳がんの診断の進め方は？

医師による問診・視触診。さらに画像診断としてマンモグラフィ・超音波検査（エコー）があります。

マンモグラフィとは？



マンモグラフィとは乳房専用のX線撮影で、触っても判らない早期の乳がんを白い影や微細な石灰化像（砂粒のように見える）として見つけることができます。乳房をプラスチックの板で挟み圧迫しながら撮影します。検査時間は10～15分程度です。圧迫で多少痛みを伴う場合がありますので、生理前の乳房が張った時期は避けると良いでしょう。

超音波検査とは？

乳房に超音波をあて反射波を画像にしたもので、マンモグラフィと超音波検査のどちらかでしか発見できない乳がんもあり、精密検査の際には両方の検査を行います。

細胞診および生検とは？

以上の診察と検査で、診断がつかない場合、病理診断（腫瘍の一部を取って顕微鏡で調べる）が必要です。腫瘍の取り方には、穿刺吸引細胞診（腫瘍に細い針を刺して細胞を取る）や、針生検（鉛筆の芯くらいの針を刺して腫瘍の組織を取る）があります。

乳がんの発育・進行は？

乳がんは発生してまもなく乳腺全体に拡がったり、がん細胞がリンパ管を流れ腋のリンパ節に転移したり、血管内を流れ骨・肺・肝臓など全身に転移していきます。早期がんとは、大きさが2 cm以下で転移のない場合をいい、この時期に治療を行うと5年生存率（がんの治療開始から5年後に生存している人の割合）は95%です。反対に発見が遅れ進行すると、いかなる治療を行っても再発することがあり、再発すると治療が難しくなります。

乳がんで命を落とさないためには？

今、日本では乳がんの増加とともに乳がんによる死亡率も増加していますが、欧米では乳がんは増加しているにもかかわらず乳がんによる死亡率は年々減少しています。これは欧米では40歳代の女性の70%以上がマンモグラフィによる乳がん検診を受けており、乳がんになっても早期発見・早期治療がなされているためと思われます。しかし日本では乳がん検診を受けているのは成人女性の20%以下に過ぎず、がんになっても発見が遅れることが死亡率の増加している大きな原因と思われます。

乳がんは早期発見すれば温存手術が可能で、手術後に強い抗がん剤も不要で、しかも再発も少なく完治が望めます。今や乳がんは増え誰が乳がんになっても不思議ではありません。乳がんの予防法がない現在、乳がんで命を落とさないためには、早期発見・早期治療しかありません。このためには、乳がん検診や自己検診が必要です。

乳がんの早期発見のための検診には視触診だけでは不十分で、視触診とマンモグラフィ併用の乳がん検診が推奨されます。40歳代から乳がんにかかる危険が高くなりますので、40歳を過ぎたら自覚症状がなくても、2年に1回は乳がん検診を受けることが推奨されています（できれば毎年マンモグラフィを受けましょう）。

当院では、マンモグラフィ検診精度管理中央委員会が行う撮影・読影の試験で認定された放射線技師・医師が実施していますので安心して受けていただけます。

自己検診について

定期的な乳がん検診に加え自己検診を行うことも重要です。幸いなことに乳がんは身体の表面に出来るため、自分で発見しやすいがんです。20歳から月1回のセルフチェックをしましょう。自己検診のやりかたは別のパンフレットをごらん下さい。毎月定期的に自己検診をしていますと、初めは分からなくても、ほんの僅かな変化でも自分で分かるようになります。そして少しでも気になる事があれば、自己判断せずすぐに当院の外科に受診して下さい。

乳がんはいつかかるか分かりませんし、確実な予防法もありません。自分だけは大丈夫とは思わないで下さい。ご本人のために、そしてご家族のためにも、乳がんで亡くなることを防ぐために、多くの方がマンモグラフィによる乳がん検診を受けていただくよう切に願っています。

奈良医療センター 外科

